

復興に駆ける！

第7号
平成25年7月3日発行
岩手県立生涯学習推進
センター

岩手大学 三陸復興推進機構 地域コミュニティ再生支援班

特任研究員 船戸 義和 さん



手作りベンチに座る船戸さん。後ろが公民館。

船戸さんは、大学卒業後アメリカに渡り、NPOの運営、資金調達、プロジェクト運営について学びながら、NPO団体に所属し活動を行ってきた。このような経歴を持つ船戸さんにとって、東日本大震災発災に際し、支援活動に加わらないという選択肢はありえず、「NPO法人チャイルド・ファンド・ジャパン」への所属を決めた。プロジェクトマネージャーとして、大船渡へ4月下旬から入り、仮設住宅

を回って聞き取り調査をした。一番必要性を感じたのは新たなコミュニティの構築だった。そこで考えたのが、会話の生まれる場となるベンチ作りである。船戸さんは、このベンチ作りがコミュニティ形成の活動そのものであることを丁寧に説明して歩いた。完成品のベンチを購入して設置するのは簡単だが、それでは人のつながりが生まれにくい。こだわったのは住民との協働による手作りだった。みんなと一緒に作業することで会話が生まれ、ベンチにも愛着が芽生える。もしベンチが壊れても、支援者に連絡が来るのではなく、自分たちで修理するという動きへとつながるだろうという考えである。その後「^{ゆうゆう}友結ファーム」という農園活動も始め、農地を個人用に区画せず、住民主体の運営組織が管理する体制を整えた。さらには、県内最大規模の長洞仮設住宅に公民館を建設した。多人数でも使える調理場の設計、大広間には地域の人が集まって映画などが鑑賞できるようにとプロジェクターとスクリーンを設置するなど、NPOのプロフェッショナルとして高い意識を常に持ちながら、コミュニティを生み出す仕掛けを実行してきた。

2年間に亘る同法人の支援活動が終了し、船戸さんは一旦山梨の実家に戻った。しかし、岩手のことを放っておけないと、岩手大学三陸復興推進機構に所属するという決断をした。これからは岩手の復興が、住民の手によって主体的に進められるように、長期的な視野に基づいた場作りを行っていくと熱く語っていた。

連絡先

岩手大学 地域コミュニティ再生支援班

Tel : 019-621-6619

Mail: funato@iwate-u.ac.jp